

の瓦器碗小片1点を除く他は弥生時代後期後半の土器である。

6. 第8次調査の概要 (図13～15、写真17～24)

福祉・保養施設の建設に伴い並松小学校南方の丘陵地東南部を削平することになり、第5次調査で試掘できなかった箇所へ発掘区を設定し、その事前調査として実施した。便宜上、丘陵部に相当する調査地西側をI地区、丘陵裾部に相当する調査地東側をII地区として調査を進めており、この区別に従って以下に調査概要を記す。

A. I地区の概要

南から北へ伸びる丘陵の後線上に沿って第2発掘区、東西方向の谷部から西側の丘陵斜面に沿って第3発掘区、そこからさらに丘陵斜面へ向かって放射状に第4・5発掘区を設定した。その結果、丘陵斜面で広域的に縄文時代早期の遺物包含層が堆積していることが判明し、東面する丘陵斜面全域に発掘区を拡張して調査を実施した。

丘陵斜面の基本層序は、表土の下に黒褐色粘質土・黒色粘質土・暗褐色粘質土が続き、地表下0.8～1.0mで地山となる。黒色粘質土には縄文時代早期の遺物を包含しており、高山寺式土器や石帯が出土した。

縄文時代の遺物が出土する4基の土坑を発掘区南西隅付近で確認したほか、風倒木痕跡かとみられる土坑が点在する。以下に4基の土坑の概要を記す。

SK01 直径1.2m・深さ0.6～0.7mの円形土坑。底部中央に直径0.3m・深さ0.3mの窪みがある。

SK02 東西1.9m・南北1.2m・深さ0.4mの東西に長い不整形土坑である。

SK03 長さ4.5m前後・幅1.0～1.6m・深さ0.6mの土坑で、北端部は攪乱で壊されている。

SK301 東西1.3m・南北0.8m・深さ0.3mの東西に長い不整形土坑。サヌカイト剥片が多く出土した。

B. II地区の概要

丘陵地東裾に沿って東西方向に並列する2つの発掘区を設定した。便宜上、東側を第1発掘区、西側を第2発掘区と呼び分ける。第1発掘区の南端を西側へ大きく拡張し、第5次調査で確認した瓦窯の範囲も追求した。

基本層序は、耕土下に黒褐色シルトあるいは黒色シルトが続き、地表下0.4～0.6mで遺構面の地山となる。谷部に相当する発掘区中央部では顕著な遺構が認められない。一方、東面する丘陵斜面裾部にあたる第1発掘区の北・南端部では、弥生時代中期の竪穴建物・溝・土坑や江戸時代の瓦窯が分布する。以下に主要な遺構の概要を記す。

竪穴建物S11011 第1発掘区の北端に位置する平面円形の竪穴建物で、西半部のみを検出した。地形が

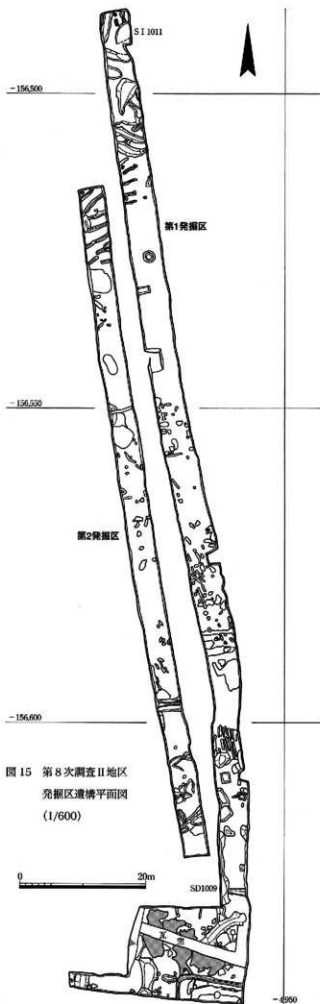


図15 第8次調査II地区
発掘区遺構平面図
(1/600)

低くなる南側は削られて残っていない。復元直径5.4m、良好に残る北端で深さ0.35m。西側の一部で幅0.15m・深さ0.05mの周溝がある。床面中央寄りの2箇所で、受熱赤変した焼土の広がりを確認した。床面から弥生中期の土器と石包丁(図29-11)が出土している。

溝SD1009 第1発掘区南側の西壁沿いで検出した南北方向の溝で、東半部のみを検出した。規模は全長11.45m・幅1.0m以上・深さ0.3~0.5mである。小型壺(図25-9)を含む弥生中期の土器多数と磨製石剣(図29-10)が出土した。

瓦窯(図15 アミ伏せ部分) 焼土層や炭層の広がりなどから、5基の瓦窯が東西に並んで構築されているらしい。埋土に椀瓦を含み、江戸時代以降の瓦窯であることがわかる。平面検出にとどめたため、詳しい構造はわからない。

7. 第9次調査の概要(図16・17、写真25~27)

遺跡の範囲確認調査で、南北道路を挟んで第8次調査地の南東側に発掘区を設定した。東面する丘陵斜面裾の緩傾斜地に相当する。

基本層序は、耕土下に暗褐色粘質土が堆積するだけであり、地表下0.35~0.5mで遺構面の地山となる。

検出遺構には、方形周溝墓2基とそれに伴う周溝・土坑がある。以下にその概要を記す。

方形周溝墓ST01 SD01とSD02で区画された東西2.9~3.0m・南北4.1m以上の長方形の高まりで、墳丘及び埋葬施設は削平されて遺存しない。

方形周溝墓ST02 SD02とSD03で区画された方形の高まりが本来存在したと考えられるが、東へ向かって遺構面が下がっていくので、東面を画する周溝と墳丘及び埋葬施設は削平を受けて遺存しないと考えられる。

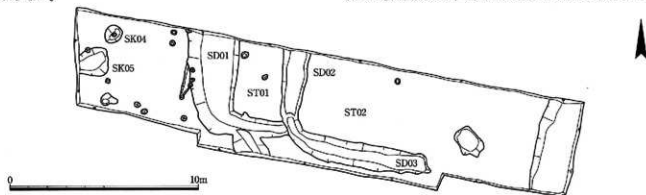


図16 第9次調査 発掘区遺構平面図(1/200)

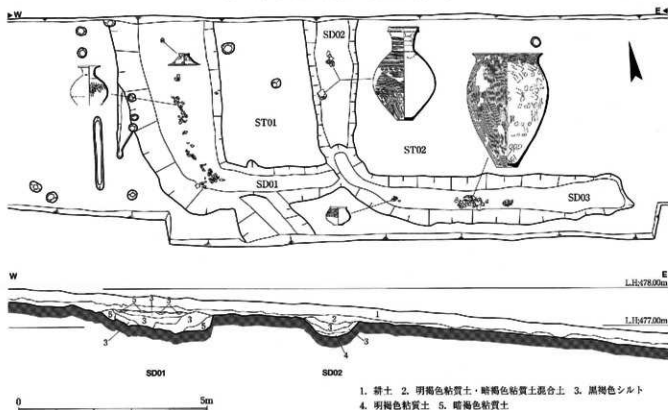


図17 第9次調査 ST01・02平面図・W-Eライン北壁堆積土層図(1/100)

1. 耕土 2. 明褐色粘質土・暗褐色粘質土混合法土 3. 黒褐色シルト
4. 明褐色粘質土 5. 暗褐色粘質土

S D03がS T01の南東隅を掘り下げている点から、S T02はS T01よりも後に構築されたものとみられる。

周溝S D01 L形に屈曲するS T01の周溝で、北端は発掘区外へ続き、東端はS D03に壊される。長さは、南北方向に5.5m以上、東西方向に4.8m前後である。幅0.8～2.8m・深さ0.5～0.4mで、東へ向かうにつれて幅が狭くなるが、底の高さは概ね一定である。埋土は黒褐色シルトで、弥生時代中期の蓋形土器(図25-11)1点・同形の広口壺(図25-8)3点の他に壺3点と石鏝(図29-7～9)3点が出土した。同形の広口壺3点は近い位置に集まっており、その他の壺はS D01の南西隅付近に分布する。

周溝S D02 S D01と南北方向に平行する溝で、北端は発掘区外へ続き、南端はS D03に壊される。長さ3.4m以上・幅0.9～1.4m・深さ0.3～0.4mで、底の高さはS D01と概ね同じである。埋土は溝底に明褐色粘質土、その上に黒褐色シルトが堆積する。上下に潮れた直口壺(図25-12)1点が0.7m離れた箇所から出土した。

周溝S D03 S D02の南端に接続する東西溝で、長さ8.2m・幅0.8～1.3m・深さ0.3～0.4m。底の高さがS D01・02よりも0.2～0.3m深い。埋土は下層に褐色粘質土、上層に黒色シルトが堆積する。北へ屈曲する西端付近で無頸壺(図25-10)1点と壺底部2点、中央付近から甕(図25-13)2点と壺胴部1点が出土した。甕2点は、口縁部を東に向けて横倒しの状態で見つかり、西側が大型品(13)、東側が小型品である。

土坑S K04 直径0.9m・深さ0.15mの円形土坑で、底中央に直径0.2m・深さ0.1mの円形の窪みがある。

土坑S K05 東西1.5m以上・南北1.45m・深さ0.2mの不整形土坑で、発掘区外西へ続く。

8. 第10次調査の概要(図18、写真28)

遺跡の範囲確認調査で、第9次調査地の北方約90mの地点にあたり、東へ開く谷部の北へ下る緩斜面地に発掘区を設定した。

基本層序は、耕土下に黒褐色粘質土が堆積し、地表下0.4～0.6mで遺構面の地山となる。顕著な遺構は認められず、風倒木痕跡かとみられる3基の土坑などを検出したにとどまる。耕土・黒褐色粘質土から弥生土器・石器が出土した。

9. 第11次調査の概要(図19、写真29)

第8次調査II地区第1発掘区のすぐ北側で、村道拡幅工事の事前調査として実施し、村道西側に沿って発掘区を設定した。東面する丘陵地斜面の先端部裾に位置し、中央が高く南北に向かって低くなる地形となっている。

基本層序は、表土下に黒褐色粘質土・黒色シルトが壊

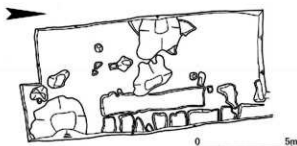


図18 第10次調査 発掘区遺構平面図(1/200)

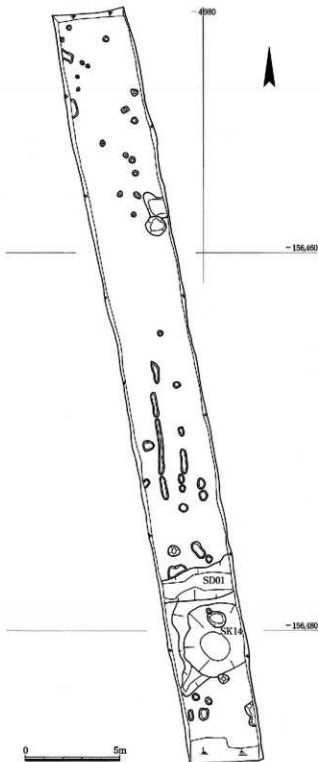


図19 第11次調査 発掘区遺構平面図(1/200)

き、遺構面の地山となる。地山までの深さは、発掘区中央で地表下0.4m、南端で地表下0.6m、北端で地表下0.8mである。

検出遺構には土坑・溝などがある。

S D01 長さ3.8m以上・幅1.2～2.8m・深さ0.2mの東西溝。弥生時代中期の土器が少量出土した。

S K14 南北0.8m・東西0.95mの楕円形土坑で、深さ0.1m。縄文時代晩期の土器が出土した。(鐘方止樹)

IV. 出土遺物の概要

1. 土器

A. 縄文土器 (図20～23、表2・3)

第8・10・11次調査において総数829点の縄文土器が出土した。早期～晩期の遺物が認められ、毎属時期により

I群 早期前葉 II群 早期中葉

III群 中期末 IV群 晩期後半

の4群に分類をおこなった。また地区ごとの出土点数は表2に示した。以下、調査次第順に報告をおこなう。

第8次調査 (図20～22) 第8次調査I地区ではII・III群が出土している。II群は黄島式～徳谷式に位置づけられるもので、A～F類に細分した。

1～21はII群A類としたもので、ボジティブ楕円文(以下楕円文)を施し、内面に斜行沈線を施すものが該当する。粗分基準は図20に示した。1～6はA1類としたもので、棒状の原体を用いて沈線を施すものである。1は外面に細長い連珠状の楕円文を不規則に、内面には幅0.3cmほどの細い沈線を左下がりに密に施す。沈線の重複から右→左方向へ施文したことがうかがわれる。2～6は幅0.7～1.0cm程の太い沈線を間隔をあけて施している。2は口縁端部を始点として沈線を施したため、器壁が押し出されて外反・肥厚している。3・4は同一個体と考えられ、当類では唯・右下がりに沈線を施している。6は沈線が端部を推く小波状を呈している。

7・8はA2類としたもので、半截竹管状の原体を用いて2本1対の沈線を施し、断面形が台形状を呈するものである。いずれも口縁部を欠き、器面も風化が著しいが、7には小粒な楕円文が認められる。

9～16はA3類としたもので、半截竹管状の原体を用いて2本1対の沈線を施す。A2類と異なり断面形はかまぼこ形を呈する。

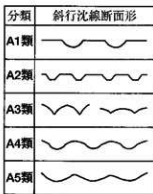


図20 II群A類分類模式図

表2 8・10・11次調査 縄文土器出土点数

発掘/地区	8K										10K		11K		合計		
	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	SK02	SK14					
I群																	
A類	1	1				4	1									7	
A1類											2	1	0	1		4	
A2類																6	
A3類						25	2	31	46	21	2	6	1			119	
A4類						31	3	12	19	1						65	
A5類						1										1	
B類						7		4	2	2	1					16	
B1類																1	
B2類a						1										1	
B2類b																1	
C類						1	161	3	79	40	148	79	21	69	10	1	542
D類																2	
E類											5					5	
F類																0	
G類																0	
H類																0	
I類																0	
J類																0	
K類																0	
L類																0	
M類																0	
N類																0	
O類																0	
P類																0	
Q類																0	
R類																0	
S類																0	
T類																0	
U類																0	
V類																0	
W類																0	
X類																0	
Y類																0	
Z類																0	
合計	2	182	4	86	07	225	134	36	71	11	2	1	8	829			

9・10・13・15・16は施文が深く、11・12・14は浅い。また11・13は同一個体と考えられるが、沈線間の間隔は広い。同一手法でも原体の大きさなどにより差異が生じるようである。

9は口縁部に粘土を貼り付けたことによる段が明瞭に認められる。10は沈線が口縁端部にまで及び端部が張り出している。12は口縁部が短く屈曲し明瞭な段を有しているが、9に比べ屈曲は短く、より意識的に行ったものと考えられる。16は頸部が強く屈曲し口縁が外反する器形で、大粒の楕円文を不規則に施文している。

17～20はA4類としたもので、半截竹管状の原体を用いて2本1対の沈線を施した後、他の工具で沈線をなぞることにより幅を広く緩やかにしたものと考えられる。17は口縁部と胴部により器形を復元した。口縁部が外反し胴部が張る器形である。同様に器形復元を行った11に比べ、頸胴部界の境は緩やかである。器面は内外とも厚減が著しく文様は判別できない。18・19は口縁部外面をナデで調整し、文様が観察できない。無文帯以下に文様を施す可能性が考えられるが、明らかでない。20は外面に細長い楕円文を右下がり斜めに施す。

21はA5類としたもので、ユビを用いて幅が広く緩やかな沈線を施し、断面形は稜の明瞭な三角形形状を呈するものである。1点のみの出土である。外面はナデによる擦痕が僅かに認められるが、文様は観察できない。

22～27はII群B類としたもので、外面に楕円文を施し、内面に沈線を施さないものが該当する。22～25はB1類としたもので、内面は文様を施さない。22は小粒、24は細長い楕円文を並列に刻んだ原体を、23は互い違いに刻んだ原体を右下がりに施す。25は粗大な菱形状を縦位に施す。26・27はB2類としたもので、内面に押型文を施す。26はB2類aで、外面縦位、内面横

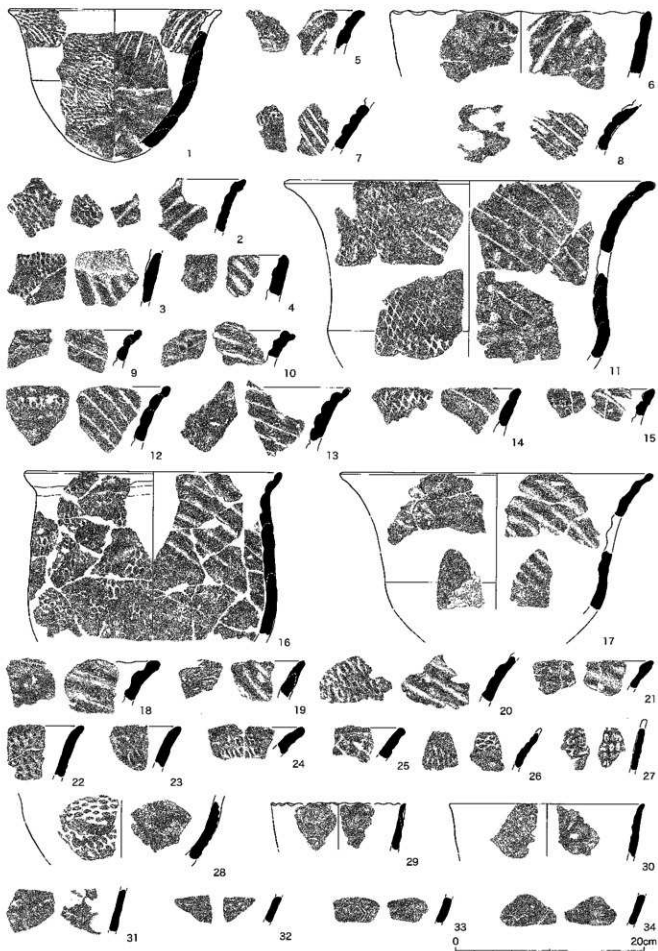


图 21 第 8 次調查出土銅文土器 (1/4)

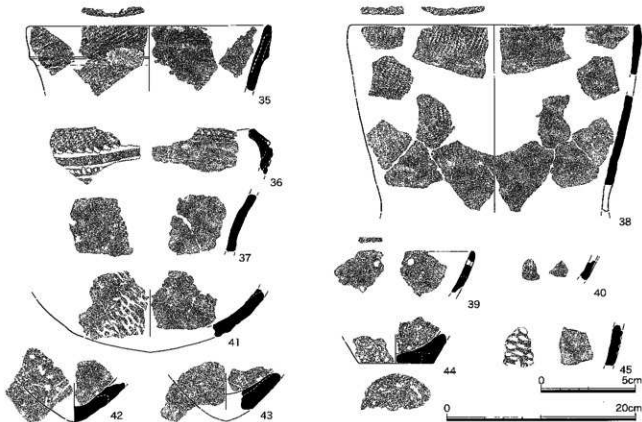


図22 第8・10次調査出土縄文土器(1/4 45のみ1/2)

表3 縄文土器観察表

層位 調査 番号	出土状況	形状・土器名	土器	用途	処理	測定		重量		容積		備考
						高さ	口径	重量	容積	高さ	口径	
1	表層	30号 陶片	赤土系灰土 100号	器内底	ナツノミヤコナリ器内底	1.95	0.6	0	0	100000	2.07/0.8	500g
2	表層	30号 陶片	赤土系灰土 100号	器内底	ナツノ器内底	1.0	0.6	0	0	100000	1.0/0.6	500g
3	表層	1号 縄文 陶片	赤土系灰土 100号	器内底	器内底	1.45	0.6	0	0	100000	1.45/0.6	500g
4	表層	1号 縄文 陶片	赤土系灰土 100号	器内底	器内底	1.5	1.0	0	0	100000	1.5/1.0	500g
5	表層	30号 陶片	赤土系灰土 100号	器内底	器内底	1.1	0.6	0	0	100000	1.1/0.6	500g
6	表層	1号 縄文 陶片	赤土系灰土 100号	器内底	ナツノ器内底	1.5	1.0	0	0	100000	1.5/1.0	500g
7	表層	30号 陶片	赤土系灰土 100号	器内底	器内底	1.1	0.6	0	0	100000	1.1/0.6	500g
8	表層	1号 縄文 陶片	赤土系灰土 100号	器内底	器内底	1.2	1.0	0	0	100000	1.2/1.0	500g
9	表層	1号 縄文 陶片	赤土系灰土 100号	器内底	ナツノ器内底	1.0	0.6	0	0	100000	1.0/0.6	500g
10	表層	30号 陶片	赤土系灰土 100号	器内底	器内底	1.3	0.9	0	0	100000	1.3/0.9	500g
11	表層	30号 陶片	赤土系灰土 100号	器内底	器内底	1.4	0.8	0	0	100000	1.4/0.8	500g
12	表層	1号 縄文 陶片	赤土系灰土 100号	器内底	器内底	1.2	1.0	0	0	100000	1.2/1.0	500g
13	表層	1号 縄文 陶片	赤土系灰土 100号	器内底	器内底	1.3	0.7	0	0	100000	1.3/0.7	500g
14	表層	30号 陶片	赤土系灰土 100号	器内底	器内底	1.0	0.6	0	0	100000	1.0/0.6	500g
15	表層	30号 陶片	赤土系灰土 100号	器内底	器内底	1.1	0.6	0	0	100000	1.1/0.6	500g
16	表層	30号 陶片	赤土系灰土 100号	器内底	器内底	1.35	0.8	0	0	100000	1.35/0.8	500g
17	表層	30号 陶片	赤土系灰土 100号	器内底	器内底	1.15	0.8	0	0	100000	1.15/0.8	500g
18	表層	30号 陶片	赤土系灰土 100号	器内底	器内底	1.5	1.2	0	0	100000	1.5/1.2	500g
19	表層	30号 陶片	赤土系灰土 100号	器内底	器内底	1.4	0.8	0	0	100000	1.4/0.8	500g
20	表層	1号 縄文 陶片	赤土系灰土 100号	器内底	器内底	1.3	1.0	0	0	100000	1.3/1.0	500g
21	表層	30号 陶片	赤土系灰土 100号	器内底	ナツノ器内底	1.05	0.6	0	0	100000	1.05/0.6	500g
22	表層	30号 陶片	赤土系灰土 100号	器内底	器内底	1.1	0.6	0	0	100000	1.1/0.6	500g
23	表層	30号 陶片	赤土系灰土 100号	器内底	器内底	1.28	0.8	0	0	100000	1.28/0.8	500g
24	表層	30号 陶片	赤土系灰土 100号	器内底	器内底	1.1	0.6	0	0	100000	1.1/0.6	500g
25	表層	30号 陶片	赤土系灰土 100号	器内底	器内底	1.1	0.6	0	0	100000	1.1/0.6	500g
26	表層	30号 陶片	赤土系灰土 100号	器内底	器内底	1.1	0.6	0	0	100000	1.1/0.6	500g
27	表層	30号 陶片	赤土系灰土 100号	器内底	器内底	1.1	0.6	0	0	100000	1.1/0.6	500g
28	表層	30号 陶片	赤土系灰土 100号	器内底	器内底	1.1	0.6	0	0	100000	1.1/0.6	500g
29	表層	30号 陶片	赤土系灰土 100号	器内底	器内底	1.1	0.6	0	0	100000	1.1/0.6	500g
30	表層	30号 陶片	赤土系灰土 100号	器内底	器内底	1.1	0.6	0	0	100000	1.1/0.6	500g
31	表層	30号 陶片	赤土系灰土 100号	器内底	器内底	1.1	0.6	0	0	100000	1.1/0.6	500g
32	表層	30号 陶片	赤土系灰土 100号	器内底	器内底	1.1	0.6	0	0	100000	1.1/0.6	500g
33	表層	30号 陶片	赤土系灰土 100号	器内底	器内底	1.1	0.6	0	0	100000	1.1/0.6	500g
34	表層	30号 陶片	赤土系灰土 100号	器内底	器内底	1.1	0.6	0	0	100000	1.1/0.6	500g
35	表層	30号 陶片	赤土系灰土 100号	器内底	器内底	1.1	0.6	0	0	100000	1.1/0.6	500g
36	表層	30号 陶片	赤土系灰土 100号	器内底	器内底	1.1	0.6	0	0	100000	1.1/0.6	500g
37	表層	30号 陶片	赤土系灰土 100号	器内底	器内底	1.1	0.6	0	0	100000	1.1/0.6	500g
38	表層	30号 陶片	赤土系灰土 100号	器内底	器内底	1.1	0.6	0	0	100000	1.1/0.6	500g
39	表層	30号 陶片	赤土系灰土 100号	器内底	器内底	1.1	0.6	0	0	100000	1.1/0.6	500g
40	表層	30号 陶片	赤土系灰土 100号	器内底	器内底	1.1	0.6	0	0	100000	1.1/0.6	500g
41	表層	30号 陶片	赤土系灰土 100号	器内底	器内底	1.1	0.6	0	0	100000	1.1/0.6	500g
42	表層	30号 陶片	赤土系灰土 100号	器内底	器内底	1.1	0.6	0	0	100000	1.1/0.6	500g
43	表層	30号 陶片	赤土系灰土 100号	器内底	器内底	1.1	0.6	0	0	100000	1.1/0.6	500g
44	表層	30号 陶片	赤土系灰土 100号	器内底	器内底	1.1	0.6	0	0	100000	1.1/0.6	500g
45	表層	30号 陶片	赤土系灰土 100号	器内底	器内底	1.1	0.6	0	0	100000	1.1/0.6	500g

位に楕円文を施す。27はB2類bで、外面は楕円文、内面は格子目文を横位に施す。a・bどちらも口縁部端部を欠いているが、aは外反、bは直立する器形と考えられる。

28はII群C類としたもので、A・B類の胴部片である。横位に楕円文を施し、その上から粘土を被覆する接合手法が顕著に認められる。29・30はD類としたもので、押取文を施さないものである。29は口縁部が小波状を呈する小型の深鉢である。外面には僅かに凹溝が認められるが、文様か否か判然としないため本類に位置づけた。30は直立する深鉢で、口縁部が僅かに外反する。外面は器面の風化が著しいが、凹凸が認められないため文様は施されていないと考えられる。内面には指頭丘痕が顕著に認められる。

31～34はII群E類としたもので、大型の山形文を施すものである。31～33は縦位、34は横位に施文している。これらは同一個体と考えられ、胎土は角閃石を多く含む褐色の色調で、いわゆる生駒西麓産の胎土である。

II群の内A類は内面に斜行沈線を施すため高山寺式に比定され、またB1類とC類は器厚や文様がA類と相違が見られないことから同時期のものと考えられる。対して、B2類とD類は文様構成・器厚の差異が顕著であり、製作技術的に同時期とは考えにくい。黄島式→高山寺式の間に比定されるものであろう。またE類は穂谷式に比定されるものである。

35～40はIII群としたもので、中期末に比定されるものである。特徴によりA～E類に細分をおこなった。

35はA類としたもので、口縁部に断面三角形の隆帯を貼付けるものである。隆帯上下と口縁端部に縄文LRを横位に施す。内面には筋状の擦痕が認められる。

36・37はB類としたもので、同一個体と考えられる。口縁部は縄文RLを横位に施し、沈線を巡らせた後左→右方向へ刺突を施している。また胴部は縄文RLを縦位に施す。口縁端部に何らかの原形で刺突を施す。

38はC類としたもので、縄文LRを全面にところどころ角度を変えて施している。また、縄文施文後にナデをおこなう箇所もみられる。口縁端部は内傾し、面取り後縄文を施している。

39はD類としたもので、口縁端部のみ細かい縄文LRを施し、器面内外とも丁寧なナデで調整している。40はE類としたもので、小片のためモチーフは不明であるが縦位の沈線を施している。また沈線内には細かい筋が認められる。

41～44は底部片で、41～43は尖底、44は平底である。41はII群A4類の底部と考えられるもので、やや丸底に近い。右下がりに大粒の楕円文を施している。42は底部が残存しており、緩やかな尖底であることがうかがわれる。42・43ともに器面が摩滅しているため調整は不明である。44は器面の摩滅が著しいものの、外面には縄文を施しており、胎土に多くの角閃石や繊維も含まれるため、早期後葉に帰属するものと考えられる。

第10次調査(図22)縄文土器を1点のみ確認した。45はI群としたもので、ネガティブ楕円文を施す。外面は縦位に施文し、内面はナデで調整している。堅緻な胎土で遺存状態は良いが、小片のため詳細は判然としない。大川式→神宮寺式に比定されよう。

第11次調査(図23)SK14から2個体分8点が出土した。晩期後半に比定されるものである。IV群とし、調整により細分をおこなった。

46はA類としたもので、口縁端部に接して断面三角形の刻み目凸帯を施す。刻みは浅く、間隔は0.2cm程で密である。器面は摩滅のため調整はやや不明瞭であるが、外面胴部には右→左方向のナデケズリ、胴部には板状工具によるナデの痕跡が認められる。また器面内外には粘土紐の痕跡が明瞭に認められる。

47はB類としたもので、ケズリで調整している。砂粒を非常に多く含み、外面には下→上方向にケズリをおこなったことが砂粒の動きから顕著にうかがえる。内面は丁寧なナデで調整され、左上がり斜方向の擦痕が顕著に認められる。また外面には細かい凹溝が見られるが、粘土紐接合の単位であると考えられる。

46・47は土坑内から重なって出土しているため、両者は一括資料であると言える。46は尖帯の貼付け位置や形状、また刻みの特徴から長原式に比定される。また器形は球形を呈し、長原遺跡深鉢B1類に類似する¹⁾。B

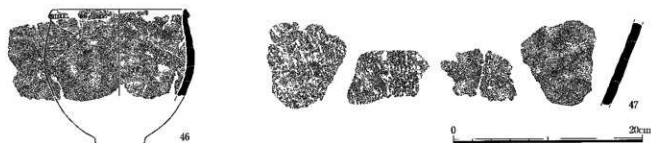


図23 第11次調査 SK14出土縄文土器(1/4)

類の胴部上半の様相は不明であるが、原厚跡深鉢A類がケズリを多用する点からすれば、本稿IV群A・B類の共伴は整合性のあるものといえよう。(熊谷博志)

B. 弥生～古墳時代の土器

第3次調査から第11次調査において、遺物整理箱で33箱分の弥生～古墳時代の土器が出土している。整理未了のため、ここでは主要な遺構から出土した土器の概要を次数ごとに述べることにする。

(1). 弥生時代前・中期の土器

弥生時代前期の土器は大和第Ⅰ-2様式、中期の土器は大和第Ⅱ-3から第Ⅲ-4様式に属するものが主に出土している。

第4次調査ST01周溝出土土器(図24-1～6)

周溝埋土から出土した土器には、細頸壺2点(1)・広口壺3点(2・3)・有段口縁広口壺1点(4)・鉢1点(5)のほか甕・高坏などの破片がある。これらは、大和第Ⅲ-3・4様式に相当し、周溝墓ST01の構築時期を示す資料と判断できる。また、大和第Ⅰ-2様式の壺・甕(6)・鉢など弥生時代前期の破片も少量出土しているが、多くは溝上層埋土に含まれており、2次堆積した資料とみられる。弥生時代前期の土器を確認できるのはここだけにほぼ限られる。以下に、図示した土器の特徴を記す。

細頸壺(1) やや張り出した胴部と外傾ぎみに上方へびる口頸部をもち、口縁部を欠失する。胴部外面下半は縦位ミガキの後、下半上部へさらに横位ミガキを行う。胴部内面は縦位ハケ調整を行う。外面には、頸部に柳描き直線文4帯、頸胴部界に柳描き簾状文1帯、胴部上半に柳描き直線文9帯、胴部最大径部分に柳描き波状文1帯を施し装飾する。残存高32.0cm、胴部最大径26.6cm、底径5.1cm。

広口壺(2) やや横に広がる胴部をもち、頸部は外反し、口縁部は水平に広がる。口縁端部を上下に拡張させてその端面に柳描き波状文を施し、4個一単位の円形浮文を5方向に貼り付ける。口縁部内面には柳描き刺突文を4方向に施す。頸部外面を縦位ハケ、胴部外面下半は縦位ミガキの後、下半上部へさらに横位ミガキを行う。胴部内面は、斜方向にハケ調整する。胴部外面は、上半に柳描き直線文5帯、胴部最大径部分で柳描き波状文1帯を施し装飾する。器高26.0cm、口径15.0cm、胴部最大径21.4cm、底径6.0cm。

広口壺(3) 直立気味に立ち上がる頸部から屈曲した口縁部が大きく外反する。胴部の下半部を欠失する。口縁端部を下に拡張させてその端面に柳描き波状文を施す。外面には、頸部に柳描き波状文、胴部上半に柳描き

直線文、胴部最大径部分に柳描き波状文1帯を施す。内面は、斜方向のハケ調整を行う。残存高17.6cm、口径15.6cm、胴部径24.0cm。

有段口縁広口壺(4) 直立して立ち上がる頸部と屈曲した受口状の口縁部をもち、口縁端部を肥厚させる。口縁屈曲部には凹線文2条を施す。胴部はやや肩が張り、底部を欠失するもの縦長の形状をもつと推測できる。頸胴部界にハケ原体による刺突文1帯をめぐらせる。外面は、胴部上半に斜方向のハケ調整を行った後、胴部上端から頸部にかけて縦位のハケ調整、下半には縦位のケズリを行う。内面は、頸部に横位のハケ調整、胴部に縦位のハケ調整を行う。残存高41.5cm、口径21.6cm、胴部径42.4cm。

鉢(5) 平底から外傾してのびる体部と内湾する口縁部からなり、塊形を呈する。口縁端部は折り返しが退化して厚みを増す。外面調整は、口縁部をヨコナデし、体部に縦位のハケ調整を行う。内面調整は、横位の板ナデ調整である。器高9.9cm、口径17.9cm、底径5.5cm。

以上の1～5は、周溝墓ST01に伴う供献土器とみられる。

甕(6) 端部に刻目をいれた短く屈曲する口縁部をもち、体部上端にへう描きの沈線文1条を施す。体部の内外面には、横位のハケ調整を行う。

第5次調査南弘張区出土土器(写真32)

部分的に掘削した溝内出土資料として、SD02から出土したものに大和第Ⅲ-4様式の甕・高坏(写真32左)、SD03から出土したものに大和第Ⅱ-3様式の広口壺・広口長頸壺・甕がある。また、SD04からは大和第Ⅲ-4様式の広口壺(写真32右)、SD05からは大和第Ⅱ-3様式の広口壺・広口長頸壺が出土している。

第8次調査出土土器(図25-7・9)

SD1011から出土した土器には、大和第Ⅱ-3様式の甕があり、円形整穴建物の時期を示す資料と判断できる。SD1009出土土器には、大和第Ⅲ-4様式の小型広口壺(9)・甕などがあり、遺物包含層からは大和Ⅲ-3様式の広口壺(7)1点が出土している。以下に、図示した土器の特徴を記す。

小型広口壺(9) 下半が横に広がる扁平形を呈する胴部をもち、頸部から口縁部にかけて緩やかに外反し、口縁端部は下方へ拡張する。底部は焼成後に穿孔される。外面は、口縁部から胴部にかけて縦位のハケ調整を行う。口縁端部に柳描き直線文、口縁部下に柳描き刺突文、胴部上半に柳描き簾状文1帯、その下に柳描き直線文1帯を施し装飾する。口縁部内面には4方向に円形浮文を一つずつ貼り付けている。器高9.0cm、口径5.5cm、胴部径

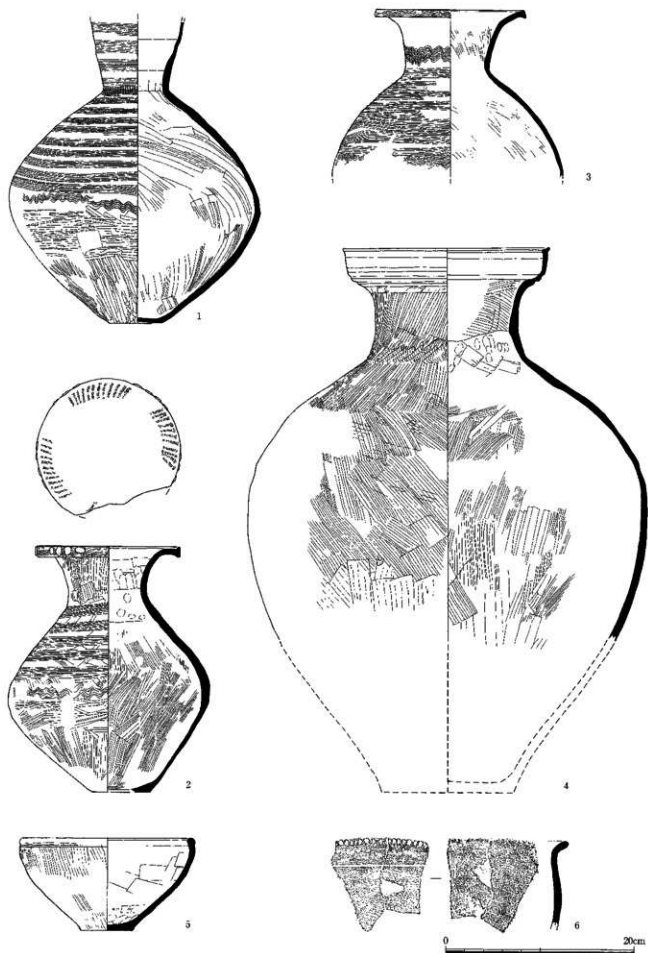


图24 第4次調査 ST 01 周溝出土弥生土器 (1/4)

8.5cm、底径3.1cm。

広口壺(7) 口縁部から頸部を欠失、やや縦長の胴部をもつ。胴部上半に柳描き直線文を施す。外面は縦位のハケ調整、内面はナデ調整で仕上げる。残存高20.6cm、胴部径17.6cm、底径6.0cm。

第9次調査SD01～03出土土器(図25・8・11～13)

SD01からは、ほぼ同形の無紋広口壺(8)が3点・柳描き直線文と扇状文を施す広口壺1点・柳描き雁状文を胴部に施す壺胴部1点・壺底部1点・蓋(11)1点が出土しており、SD02出土土器には直口壺(12)1点がある。これらは大和Ⅲ-1様式に相当し、周溝基

ST01の構築時期を示す資料である。また、SD03からは細頸壺口縁部1点・無頸壺(10)1点・柳描き直線文と斜格文を施す壺胴部1点・壺底部2点・蓋(13)2点などが出土している。これらは大和Ⅲ-2様式に相当し、周溝基ST02の構築時期を示す資料である。

広口壺(8) 直立気味に立ち上がる頸部と屈曲して大きく外反する口縁部をもつ。口縁端部は下方へ少し巻き込む。胴部は球形で、下半部を欠失する。外面はハケ調整の後ナデで仕上げ、無紋である。胴部内面の一部には、不規則に刻まれた縦位の条線が残る。残存高19.7cm、口径9.0cm、胴部径15.8cm。

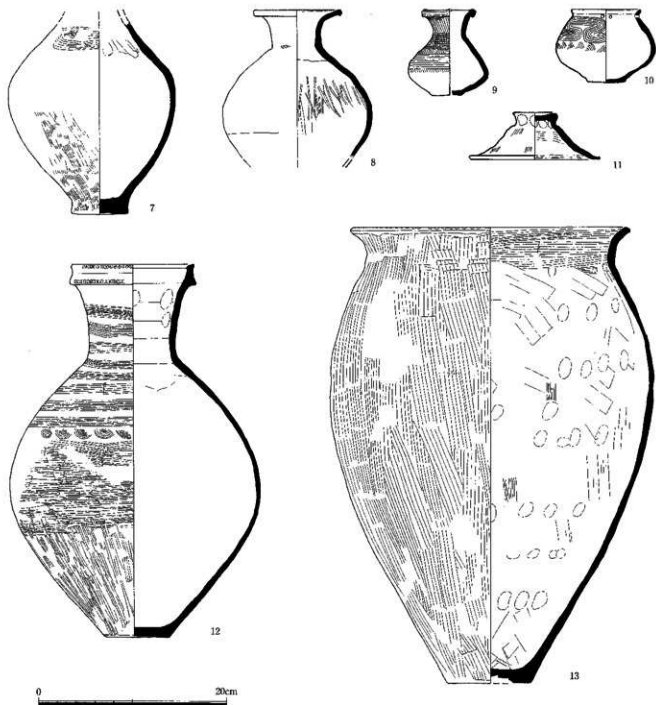


図25 第8・9次調査出土弥生土器(1/4)

無頸壺 (10) 短く外反する口縁部の直下に2孔一對の紐孔があけられる。胴部最大径はやや下にある。外面には、胴部上半部に梅掻き流水文1帯とその下に扇状文を施す。内面はナデ調整である。器高7.7cm、口径7.3cm、胴部径10.5cm、底径4.0cm。

蓋 (11) つまみ部の先端がくぼみ、体部から裾部にかけて広がる形態を呈する。つまみ部は指おさえて成形し、指頭汗痕が残る。体部には、外面に縦位のハケ調整、内面に横位のハケ調整を行う。器高5.0cm、つまみ部径4.2cm、裾径13.6cm。

直口壺 (12) 縦長の胴部から頸部が直立し、突帯を貼り付けて成形した有段の短い口縁部をもつ。口縁端部は内傾する面をなす。口縁部外面に2条の刻目をつける。頸部から胴部上半にかけて梅掻き直線文8帯とその下に扇状文を施す。胴部下半は、縦位ミガキの後、上方に横位ミガキを行う。内面は、口頸部をヨコナデ調整、胴部をナデ調整する。器高34.5cm、口径12.7cm、胴部径26.6cm、底径7.0cm。

壺 (13) いわゆる大和型壺で、口縁部は短く外反し、端部に刻目をつける。胴部内外面を縦位にハケ調整し、口縁部内面を横位のハケ調整する。器高48.1cm、口径28.8cm、胴部径34.3cm。さらに器高25.0cm、口径17.0cmの小型壺1点がある。

他に第11次調査S D01から大和Ⅲ-3様式の広口壺・甕の小片が出土している。(鎌方正樹・秋山成人)

(2) 弥生時代後期の土器

第6次調査で確認した竪穴建物S 101・02出土の弥生時代後期の土器について報告する。

第6次調査S 101出土土器(図26-1・2) 広口壺(1)、脚付鉢(2)などがある。

広口壺(1)は口径13.5cm。口縁部は内・外面ともナデ調整が施される。肩部は外面でミガキ調整、内面でナデ調整を行う。人和第VI-3様式の特徴をもつ。脚付鉢(2)の脚部は中突の円柱状である。体部は内・外面ともハケ調整が施される。下半部に指頭汗痕が残る。

第6次調査S 102出土土器(図26-3~9) 壺、甕、鉢、高杯、手焙り形土器等がある。

長頸壺(3)は器高17.8cm、口径9.0cm、体部最大径12.0cm。口縁部と体部の外面はミガキ調整が施され、内面は口縁部から肩部にかけてナデ調整、以下でハケ調整が施される。肩部と体部の境に接合痕がわずかに残る。口縁部や体部の内・外面に指頭汗痕がわずかに残る。同(4)は口径10.4cm、体部最大径12.0cm。口縁部は内・外面ともハケ調整が施され、口縁部端部ではその後さらにナデ調整を行う。肩部の外面は口縁部と一連でハケ調整が施される。胴部から体部にかけての内面はナデ調整を行う。口縁部から肩部にかけての内面に接合痕が、肩部内面には指頭汗痕がわずかに残る。

壺(6)は、口径17.0cm。口縁部は立ち上がり受口状をなす。口縁部は内・外面ともナデ調整を行う。体部の外面はタテハケ、内面はタテ方向のケズリで調整す

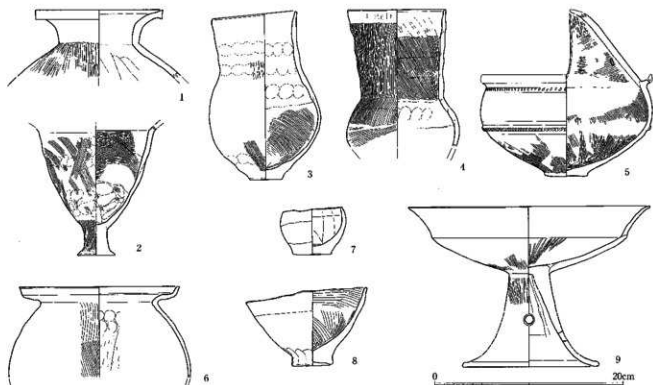


図26 第6次調査S 101・02出土弥生土器(1/4)

る。肩部内面には指頭圧痕がかすかに残る。

鉢(7)は、器高5.0cm、口径6.0cm、体部最大径7.0cmの小型のもの。口縁部の内・外面と体部内面はナデ調整が施される。体部外面は無調整で、爪形状や繊維状の圧痕が残る。同(8)は、器高8.3cm、口径12.8～13.2cm。口縁部と体部の外面はナデ調整が施され、内面は全体にハケ調整が施される。底部外面に指頭圧痕が残る。

高杯(9)は、器高17.0cm、口径25.5cm、脚部直径14.4cm。杯部の体部外面にハケ調整が、同内面にミガキ調整が施される。口縁部と体部との境に接合痕がみられる。脚軸部の外面上半にはハケ調整がみられ、内面にははしぼり目が残る。透かし孔は4方向で、対向する2孔は高さをそろえる。

手焙り土器(5)は、器高18cm程度、口径18cm程度で、体部最大径18.0cm。口縁端部は立ち上がり受口状をなすとみられる。覆い部は頸部内面に載るように付着し、左右一対の透かし孔がある。内面はハケ調整が施される。体部の中央部外面には貼付突帯がめぐり、その上面と頸部外面は刻み目で装飾される。内・外面ともハケ調整が施される。底面には葉脈の圧痕が残る。

これらの土器の形態や組成は、いずれも大和第六様式の特徴をもつ。(安井宣也)

C. 古墳時代の土器

第4次調査S101出土土器(図27-1～3) 壺・甕・高杯・鉢・器台が出土している。その中で、床面上から出土した鉢1点と器台2点を図示した。鉢(2)は口縁部の一部を欠失するのみで、ほぼ完形品。口径12.9～13.2cm・器高6.5cm。外面はナデ調整するが、粘土を押し広げた際の亀裂と粘土接合痕が残る。一方、内面は板ナデ調整するが、調整前についた繊維状の圧痕が局所的にみられる。底部は無調整で凹む。鼓形器台(1)は口縁部と脚部の一部を欠失し、表面の風化が著しい。復原口径13.7cmで、器高は7.1cmほどだろう。受部は内面をヨコ方向のミガキで調整しているようにみえ、外面調整

は不明。脚部は外面をタテ方向のミガキ、内面を板ナデして調整する。小型器台(3)は脚部の一部を欠失する。口径8.3～8.5cm・器高9.0cm。受部は外面をヨコ方向の粗いミガキで調整するが、内面の調整は表面風化のため不明。脚部は外面を粗いタテ方向のミガキ、内面をタテ方向のナデで調整する。脚部には、直径0.8cm前後の円孔が3方向に穿たれている。

第4次調査S102出土土器(図27-4～9) 壺・小型壺・鉢・異形土器・不明土器が出土している。壺(9)は口縁端部と体部の約半分を欠失する。器高19.5cm前後と推定され、肩部最大径15.2cmに復元できる。体部外面は、ナメハケで調整した後に下半部をヘラケズリする。体部内面は板ナデ調整で、指頭圧痕が底部内面に残る。小型壺(4)は口縁端部の一部を欠失するのみで、ほぼ完形品。口径3.2cm・器高4.57cm。内外面をナデ調整し、頸部を指でおさえて形を整える。鉢には大小がある。6は小型品で、一部を欠失する。口径7.8cm・器高4.1cm。体部外面は無調整のために粘土を押し広げた際の亀裂が放射状に残る。底部外面のみナデ調整を行い、平底に仕上げる。7は口縁部の一部を欠失するのみで、ほぼ完形品。碗形を呈し、口径12.5～12.7cm、器高5.65cm。外面は指おさえて整形した後にナデ調整する。内面は、6・7ともに板ナデ調整するが、調整前についた繊維状の圧痕が残っている。8は異形土器で、壺の上に壺を載せたような形態となっている。完形品で、口径7.3cm・器高17.05cm。小型の壺形土器を一旦製作して下半部とし、その上へ粘土紐をさらに積み上げて上半部を製作する。体部外面は粗くタタキ整形した後にナデ調整している。底部は平底で、無調整である。5は逆位のキノコ形を呈する不明土器で、蓋ではないかと思われる。口径9.2～9.6cm・残存高3.7cm。つまみとなる中央の突起を欠失する。外面に指頭圧痕が顕著に残る。(鐘方正樹)

2. 石器(表4、図28・29)

第3～11次調査で出土した石器の総数は916点であ

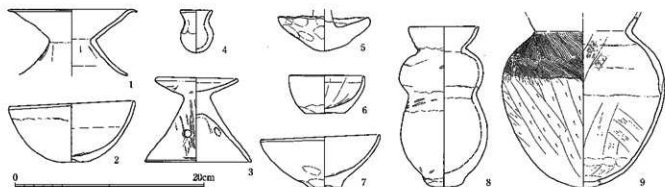


図27 第4次調査S101・02出土土器(1/4)

り、その大半は第8次調査で出土している(表1)。全体の内訳は80%余りが剥片・破片であるが、器種別に見ると石鏃と楔形石器がそれぞれ5%程度を占め、加工痕のある剥片、削器がそれに次いで若干含まれる以外は各々数点ずつである。ただし、このことは第8次調査の出土状況を大きく反映している。石材は、打製石器についてはほぼサヌカイトで占められ、剥片にチャート3点および頁岩・石英が各1点認められるのみである。磨製石器は緑色片岩、蔽石は花崗岩、磨石は砂岩を用いて

いる。

以下、遺構または単一の遺物包含層から一括して出土したものについて、時代別に述べる。

A. 縄文時代の石器 (N28)

第8次調査1地区の遺物包含層からは縄文時代早期中葉の高山寺式土器が主体的に出土しており、1地区出土の石器はこの時期に属する可能性が高いと判断される。第8次調査1地区では有舌尖頭器1点、石槍1点、石鏃21点、削器1点、楔形石器19点、磨石3点、石核3点、

表4 次数別出土石器組成

次数	有舌	石槍	石鏃	削器	石鏃	石小刀	楔	石剣	石包丁	石斧	蔽石	磨石	石核	原礫	UF	RF	剥片・破片	計
3	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	8	10
4	0	0	3	4	0	0	4	0	3	0	1	0	1	0	2	3	72	93
5	0	0	2	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	1	15	20
6	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7	8
7	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	6	8
8	1	2	36	8	5	2	34	1	2	0	0	3	4	1	3	13	532	647
9	0	0	3	0	0	0	8	0	0	0	0	0	0	0	1	7	77	96
10	0	0	1	2	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	26	30
11	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	4
計	1	2	46	15	5	2	50	1	5	1	1	3	6	1	6	25	746	916

*「有舌」は有舌尖頭器、「楔」は楔形石器、「UF」は使用痕のある剥片、「RF」は二次加工のある剥片。

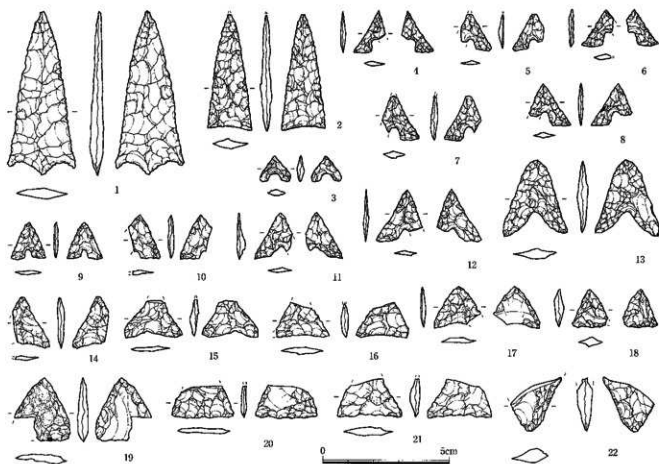


図28 第8次調査1地区出土石器(2/3)

使用痕のある剥片1点、加工痕のある剥片3点、剥片・砕片307点の総数360点が出土している。

1は有舌尖頭器である。短い舌部と明瞭な逆刺をもつ。表裏両面とも右のみ斜並行剥離が行われている。縄文時代草創期のものと考えられ、包含層にはより古い時期のものも混じっているようである。

2～21は石鏃である。2は挟りの浅い凹基長形鏃で、これも草創期に属する可能性がある。3は小型で挟りの深いタイプ。4～10は脚部底辺が直線状をなし、U字状の挟りが入る、いわゆる鏃形鏃と呼ばれる形態である。9・10は挟りがやや浅いが同型式と考える。11・12は挟りがやや開き、脚部が開いた感じを呈するた脚部底辺が直線状ではなくなるが、ほぼ同様の作りをしており、同時期の所産であろう。13はやや大型で先端部が丸みをもつ。14～16は挟りの浅い凹基式である。17も浅い挟りを呈するが、裏面は周縁加工で、脚先端が尖鋭であり、14～16とは異なるタイプである。18～21は挟りをもたない平基式だが、18は小型でやや厚みをもつもので、19～21とは素材剥片や製作技術が異なるものと考えられる。これらの石鏃のうち、特に3～10および18は早期に特徴的に見られる形態で、これらは高山寺式土器に作るものと考えられる。

22は石鏃に比して厚みがあり、石楯の一部と考えられる。形状から基部の可能性が高い。

その他の石器については時期認定が困難なため詳細は省くが、石鏃を見る限り形態的にもまとまりがあり、若干古いものが混入しているものの、1地区出土の石器はほぼ縄文時代早期中葉の遺物と考えてよいだろう。

B. 弥生時代の石器 (図29)

第4次調査で検出された方形周溝墓S T01の周溝から、石包丁2点、削器3点、楔形石器2点、敲石1点、石核2点、使用痕のある剥片1点、剥片・砕片44点の総数55点が中期の土器と共に出土している。

1・2は石包丁である。両者とも半分以下の破片であり、1は刃部形状も不明である。2は片刃直刃型で、砥ぎ直しされたものと考えられる。2の紐孔は欠損しているが、残存部からみて両者とも両側穿孔と考えられる。石材はともに緑色片岩とみられるが、2はやや灰色で硬質である。

3は楔形石器である。右側面に剪断面が残る。

4～6は削器である。4は複剥離打面の石核から剥いだ横長剥片の端部の表裏に刃部加工を行なっている。5は楔形石器の転用と考えられる。側面は古い剪断面で、周縁にはツツレが認められる。裏面の刃部付近の剥離は両極打撃による剥離痕である。6は粗い刃部をもつもの

で、主要剥離面(裏面)側の加工の方が丁寧である。

第9次調査で検出された方形周溝墓の周溝(S D01～03)からも、石鏃3点、楔形石器6点、加工痕のある剥片4点、剥片・砕片74点の総数87点が、中期の土器と共に出土している。

7～9は石鏃である。7は凸基式で、両側縁は緩やかに膨らみ、全体に柳葉形を呈す。8・9は両側縁に明瞭な肩を作り出し、刃部がやや内湾する、いわゆる五角形鏃と呼ばれる形態に含まれる。8は肩が棟状に突出し、表裏ともに周縁加工である。

第8次調査II地区では、遺構埋土および遺物包含層などのほぼ全域から石器が出土している。同様にほぼ全域で中期の土器のみが出土している状況を見ると、それらの石器が弥生時代中期に属する蓋然性が高い。第8次調査II地区では、磨製石剣1点、石包丁2点、石楯1点、石鏃15点、削器7点、石錐5点、楔形石器13点、石小刀2点、石核1点、原礫1点、使用痕のある剥片2点、加工痕のある剥片10、剥片・砕片224点の総数284点が出土している。

10は磨製石剣である。鉄剣形に分類され、茎は無く形態は打製短剣に似る。上半部中央に鞘をもつが、先端に向かってY字状に縁が分かれる。従って断面形は中央部で菱形、先端部でレンズ状となる。下半部は鋸の稜線が逆Y字状に下端まで分かれていくが、その分岐点付近を横方向に磨き、側面観がやや凹みをもつよう仕上げている。つまり握りとなる部分を扁平にし、おそらく樹皮を巻いていたものと推定される。刃部と基部を明瞭に分離して作り出した「短剣」と言える。全長約14.5cmに推定復原でき、刃部の欠損状態から実用品であった可能性が考えられる。現存重量117.2g。緑色片岩製。

11・12は石包丁である。11は外湾刃型で、砥ぎ直した可能性があり、最大幅部の左が両刃、右が片刃となっている。紐孔から左にかけて鋸状の縁がかすかに残る。紐孔は両側穿孔で、孔内壁および両孔の間に紐擦れ痕が確認できる。12は片刃直刃型。紐孔は両側穿孔。石材は両者とも緑色片岩。

13～15は石鏃である。13は尖基式、14は凸基有茎式、15は凸基式。15は両側縁が角をもって張り出し、全体に菱形を呈す。石鏃は弥生時代に属すると判断できるもののみを図示したが、この他に凹基無茎鏃も出土している。

16は石鏃である。横長剥片を素材とし、一端を丁寧な錐部として加工している。先端を欠失しており、明確な使用痕は認められない。石鏃はこの他に棟状形態のものも出土している。

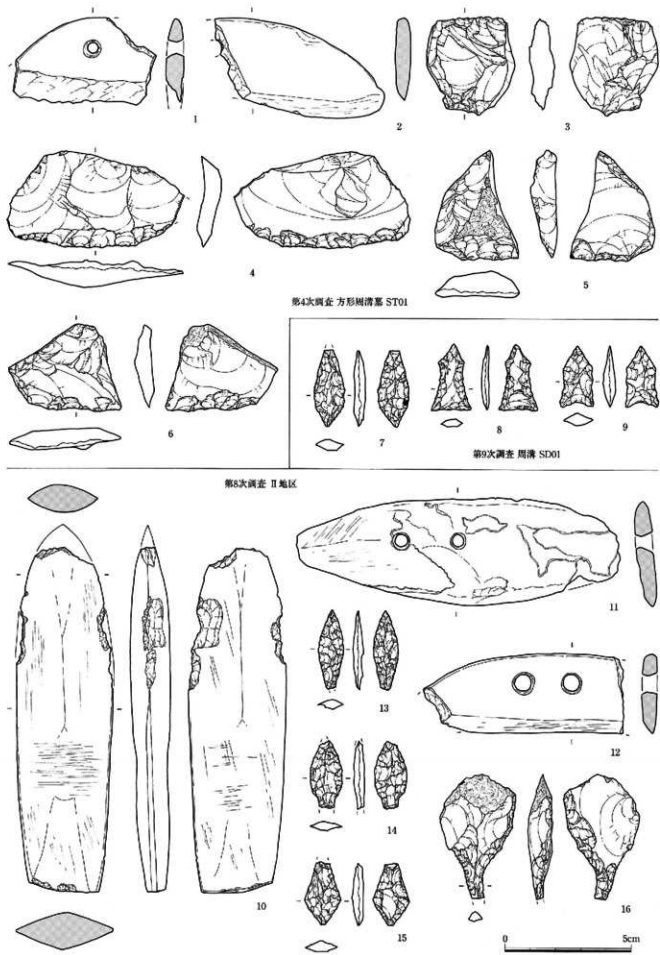


图29 第4・9次調査方形周溝墓および第8次調査II地区出土石器 (2/3)

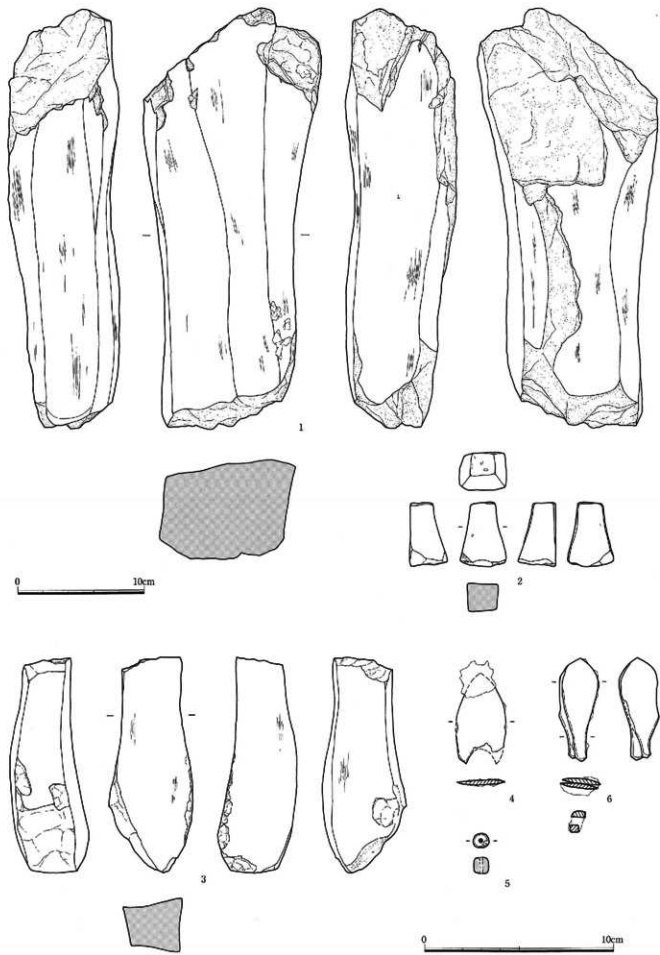


图30 第4次調査S101出土遺物・第3次調査出土鉄鏡 (1:1/3、2~6:1/2)

3. その他の出土遺物 (図30)

第3～11次調査の出土遺物のうち、石製品は、砥石4点、硯1点、石臼1点、金属製品は鉄鏃3点、ほか鉄釘が若干(錆化、破損のため数量特定が不可)ある。また土製小玉が1点出土している。このうち砥石3点、鉄鏃1点、土製小玉1点が第4次調査で検出した古墳時代の竪穴建物S101から出土している。以下、S101出土遺物について述べる。

1～3は砥石である。1は砂質の変成岩を用いた大型砥石。四面を砥面とし、正面は刃当たりによって稜ができ、砥面が分かれている。5220.0g。2は流紋岩製の小型の砥石。四面を砥面としている。19.9g。3は砂質の変成岩を用いた砥石。方柱形で四面を砥面としている。図上部は欠損と考えられるが定かではない。246.5g。

4は鉄鏃である。基部を欠損しているが、残存状態から見て、茎をもたない円基腸状式と考えられる。

5は土製小玉である。やや楕円の円柱状を呈す。暗灰褐色で、側面は磨かれ弱い光沢がある。径1mmほどの縦孔が吻部前にあけられている。

この他、第3次調査において、遺物包含層から2点が固着した状態で出土した鉄鏃がある(図30-6)。両者とも柳葉式あるいは主頭弁箭形式とみられるが識別し難く、筈被も不明瞭である。1点(図右)は関が認められ、両者は形態が異なる。(松浦五輪美)

V. まとめ

11次および発掘調査の成果からゼニヤクボ遺跡の概要を簡単に総括しておきたい。

現在、ゼニヤクボ遺跡のほぼ中央部を県道郡名張線が東西に通っており、県道に沿って住宅地が広がる。この周辺での調査例はなく、判明した遺跡の内容は南北に偏在する傾向を否めない。地形的にみると、南側に高い丘陵が連なるのに対して、北側は段丘が広がる緩傾斜地となっている。検出遺構の分布などから時間を追って遺跡の変遷を概観してみよう。

縄文時代 遺跡南側の丘陵東斜面地に早期中葉の高山寺式を中心とする遺物包含層が形成されている。ただし、広域的に調査したにもかかわらず土坑数基と風倒木痕跡が見つかっただけで、住居跡などは確認できない。地形的に考えても、小規模な生業跡の一部をとどめていたにすぎないのだろう。なお、ほとんど包含層のみが遺存するような縄文遺跡は、大和高原のいたるところに散在していた可能性があり、日当たりのよい南・東斜面地の調査は特に注意を要する。

また、晩期後半の土坑1基が第11次調査区で確認さ

れており、この周辺に当該時期の遺構が広がっている可能性も想定できる。

弥生時代 南側と北側で遺跡の盛行時期に差異があるらしいことが判明した。出土遺物からみると、弥生中期末から後期前半頃に一度断絶があると推測される。

弥生前～中期の遺跡は、南側丘陵裾部の東～北側に広がる緩斜面地で認められる。弥生前期の明確な遺構は確認できていないが、第4次調査区で破片資料が少なからず出土しており、その周辺に前期の遺構が存在している可能性は高い。検出遺構は、すべて弥生中期に属する。相対的にみて、高い方に円形の竪穴建物、低い方に方形周溝墓が分布する傾向を取看できる。

弥生後期後半の遺跡は、南側丘陵の北斜面裾部と北側の段丘上で確認できる。調査例のない遺跡中央部は、南北両側とつながる一連の段丘上に相当するので、これらは大規模な同じ集落跡の一部であった可能性が想定できる。そして、竪穴建物の平面形が円形から多角形・方形へと変化する。確認した2棟の多角形の竪穴建物からはいずれも大和VI-3様式の土器が出土しており、その構築時期は極めて限定的であった可能性がある。

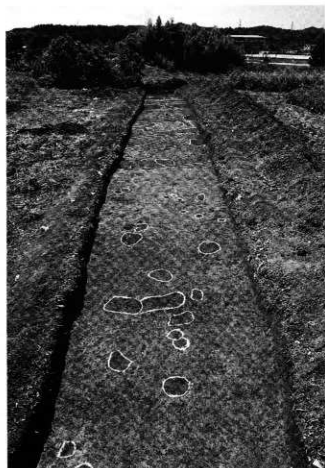
古墳時代 弥生後期後半から連続して北側段丘上を中心に方形の竪穴建物で確認できる。ただし、その構築は前期までであり、中期には廃絶する。中～後期の竪穴建物は、2.3km東の白石遺跡、6.5km北東の中萩遺跡などで確認されており、集落域が北・東方向へ移動したと推測できる。特に白石遺跡周辺の大字白石には、二重墓古墳群をはじめとする中～後期の古墳群が分布しており、集落と墓域の関連性が注意される。

古代 遺跡北端の並松池に沿った位置に水室と推測できる土坑が構築される。幾つかの土坑埋土から多くの弥生～古墳時代の土器片とともに奈良～平安時代の土器片が出土し、古代に利用されていたことが判明した。土坑の周囲には断面V字形の排水溝をめぐらせ、覆屋に伴う小柱穴が点在する。

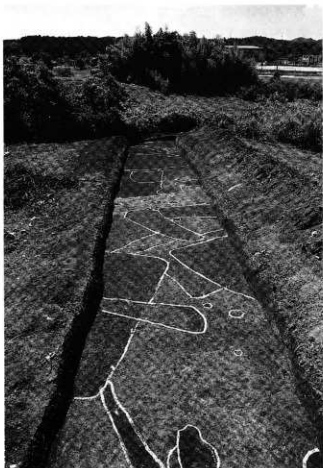
近代 遺跡南東側の丘陵裾部に瓦窯を構築し、棧瓦を生産する。瓦窯の構造は、未調査のため不明である。

以上のように概観すると、遺跡周辺では古墳時代前期まで断続的に生活遺跡が形成されたが、それ以降は古代に水室がつくられた以外、近世まで大きく利用されることがなかったようである。(籠方正樹)

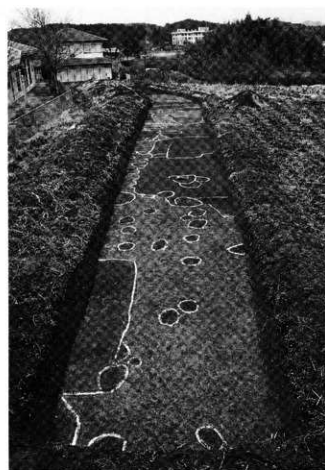
1) 松尾信樹1983「第四章 考察 第1節 縄文時代から弥生時代の遺構と遺物の検討 第1項 反原式土器系系人型にみる器形の変化」『長原遺跡発掘調査報告 Ⅲ』財団法人 大阪市文化財協会



1. 第3次調査 北発掘区全景 (東から)



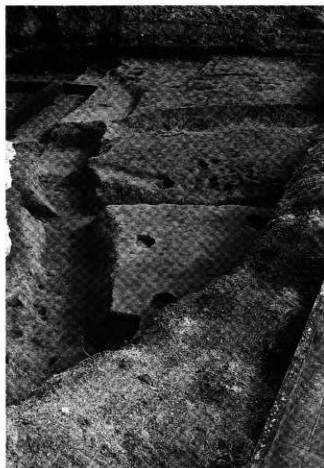
2. 第3次調査 北発掘区西半部 (東から)



3. 第3次調査 南発掘区全景 (東から)



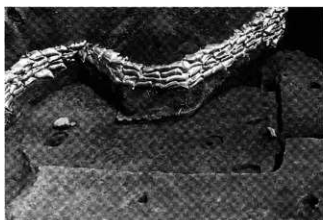
4. 第3次調査 南発掘区西半部 (北東から)



5. 第4次調査 ST01 東半部 (北西から)



6. 第4次調査 ST01 西半部 (南東から)



7. 第4次調査 S101 (西から)



8. 第5次調査 南尾根試掘調査区 (北西から)



9. 第5次調査 北拡張区 (西から)



10. 第5次調査 南拡張区 (西から)



11, 第6次調査 第1・2発掘区S I 01 (南から)



12, 第6次調査 第6・7発掘区SK 04 (南から)



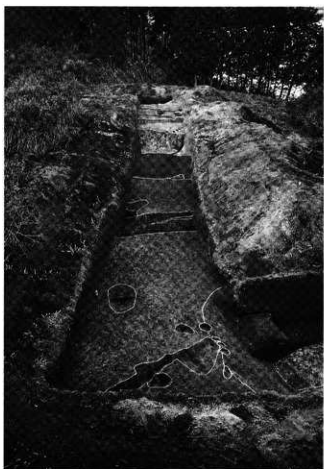
13, 第6次調査 第3発掘区S I 02・03 (東から)



14, 第7次調査 第3発掘区 (南から)



15, 第7次調査 第1発掘区 (南から)



16, 第7次調査 第2発掘区 (東から)



17. 第8次調査 亮堀区垂直写真



18. 第8次調査 発掘区全景航空写真(南東から)



19. 第8次調査 I地区第2・3発掘区(北東から)



20. 第8次調査 II地区第2発掘区(北から)



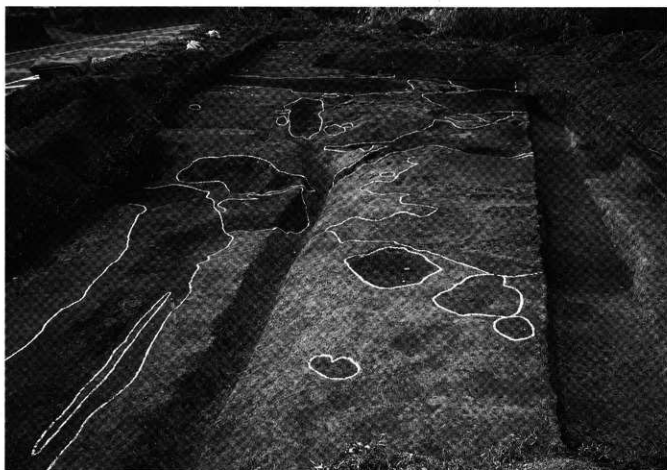
21. 第8次調査 I地区第3発掘区南西端縄文土露出土状態(東から)



22. 第8次調査 I地区第3発掘区南壁地横土層(北西から)



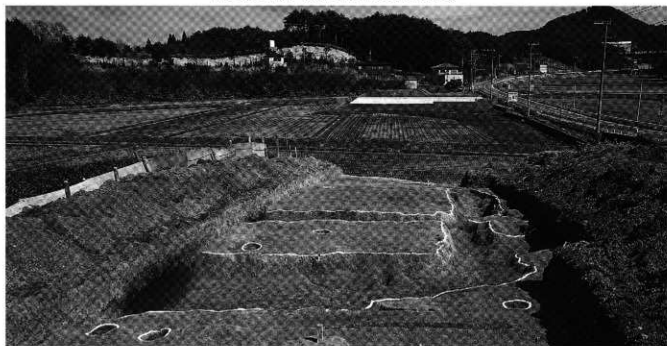
23, 第8次調査 I地区全景 (南から)



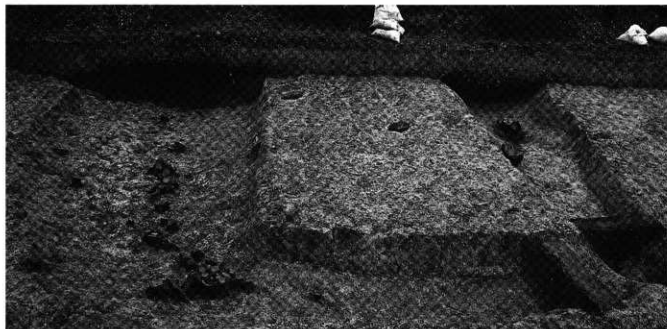
24, 第8次調査 II地区第1発掘区南坑沢部 (東から)



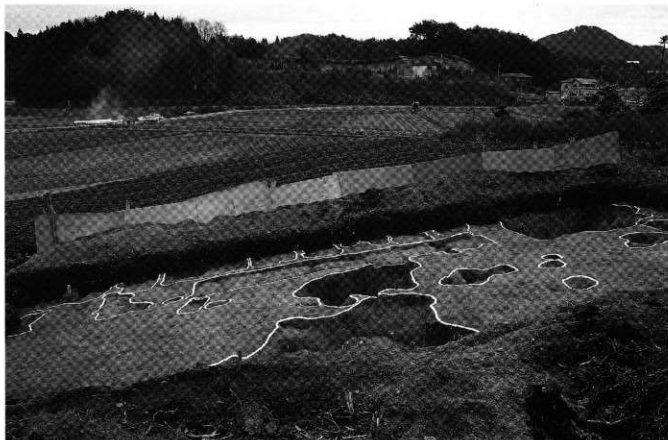
25. 第9次調査 発掘区全景航空写真 (南西から)



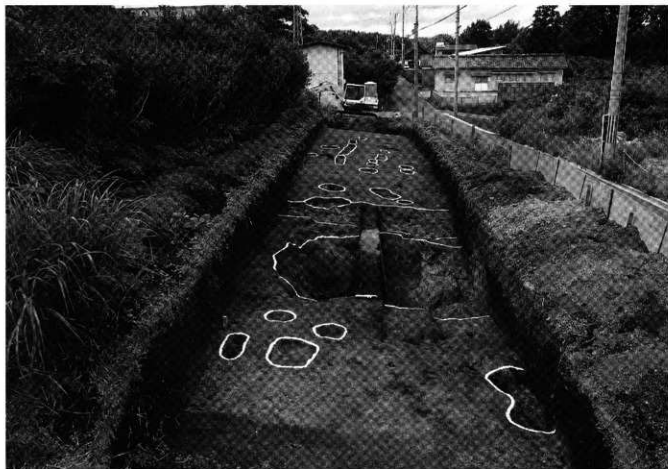
26. 第9次調査 発掘区全景 (西から)



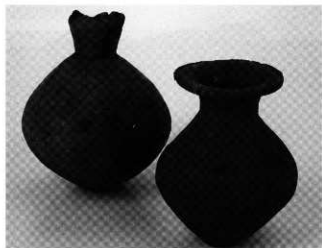
27. 第9次調査 S D 01・02 土器出土状態 (南から)



28. 第10次調査 発掘区全景（西から）



29. 第11次調査 発掘区全景（南から）



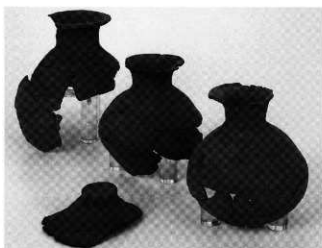
30. 第4次調査 ST 01 周溝出土土器



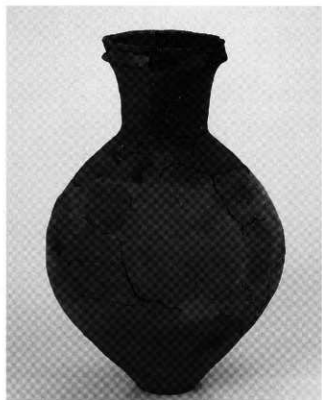
31. 第4次調査 S I 01・02 出土土器



32. 第5次調査 南畑張区SD 02 出土高杯・SD 04 出土壺



33. 第9次調査 SD 01 出土土器



34. 第9次調査 SD 02 出土土器



35. 第9次調査 SD 03 出土土器

奈良市教育委員会編集・発行の埋蔵文化財関係刊行物一覧 (昭和54年度～平成19年度発行分)

奈良市教育委員会では、昭和54(1979)年以来、専門職員を配置して奈良市内の発掘調査の対応を行っており、それらの成果等については下記の刊行物において報告されている。

1. 奈良市埋蔵文化財調査研究報告 () 内は刊行年
第1冊 史跡大安寺旧境内 I (1997)
第2冊 史跡平城京朱雀大路跡 I (1999)
* 全冊とも A4版
2. 奈良市埋蔵文化財調査報告書 () 内は刊行年
昭和54年度 (1980)、昭和55年度 (1981)、昭和56年度 (1982)、昭和57年度 (1983)、
昭和58年度 (1984)、昭和59年度 (1985)、昭和60年度 (1986)
* 全年度とも B5版
3. 奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 () 内は刊行年
昭和60年度 (1987)、昭和61年度 (1987)、昭和62年度 (1988)、昭和63年度 (1989)、
平成元年度 (1990)、平成2年度 (1991)、平成3年度 (1992)、平成4年度 (1993)、
平成5年度 (1994)、平成6年度 (1995)、平成7年度 (1996)、平成8年度 (1997)、
平成9年度第一分冊 (1998)、平成9年度第二分冊 (1998)、平成10年度 (1999)、
平成11年度 (2001)、平成12年度 (2002)、平成13年度 (2004)、平成14年度 (2006)、
平成15年度 (2006)、平成16年度 (2007)
* 昭和60～平成8年度まで B5版 平成9～16年度は A4版
4. 平城京東市跡推定地の調査 発掘調査概報 () 内は刊行年
I・1～3次の調査 (1983)、II・4次の調査 (1984)、III・5次の調査 (1985)、
IV・6次の調査 (1986)、V・7次の調査 (1987)、VI・8次の調査 (1988)、
VII・9次の調査 (1989)、VIII・10次の調査 (1990)、IX・11次の調査 (1991)、
X・12次の調査 (1992)、XI・13次の調査 (1993)、XII・14次の調査 (1994)、
XIII・16次の調査 (1995)、XIV・18次の調査 (1996)、XV・19次の調査 (1997)、
XVI・21次の調査 (1998)
* I～XVまで B5版・XVIは A4版
5. 奈良市埋蔵文化財調査年報 [ISSN 1882-9775] () 内は刊行年
平成17年度 (2008)
* 本号より創刊・A4版
6. 文化財室(課)年報
文化財室年報昭和54年度 (1980)、文化財室年報昭和55年度 (1981)、
文化財課年報昭和56年度 (1982)、文化財課年報昭和57年度 (1983)
* 全冊とも B5版

7. 奈良市埋蔵文化財調査センター紀要 () 内は刊行年
 1985 (1986)、1986 (1987)、1987 (1988)、1989 (1990)、1990 (1991)、
 1991 (1992)、1992 (1993)、1993 (1994)、1994 (1995)、1995 (1996)、
 1996 (1997)、1997 (1998)、1998 (1999)、1999 (2000)、2000 (2000)、
 2001 (2002)、2004 (2005)
 * 1986～1996までB5版 1997～2004はA4版
8. 奈良市埋蔵文化財調査センター資料 () 内は刊行年
 №1 平城京出土軒瓦型式一覧Ⅰ (1985)
 №2 藤原京・平城京跡出土軒瓦集成 (1996)
 №3 平城京跡出土墨書土器集成Ⅰ 第一分冊 (2002)
 №4 平城京跡出土墨書土器集成Ⅰ 第二分冊 (2002)
 * №1・2はB5版 №3・4はA4版 №2は奈良国立文化財研究所と共編
9. 奈良市埋蔵文化財発掘調査の歩み -速報展示リーフレット集-
 Ⅰ・平成11～14年度 (2005)、Ⅱ・平成15～17年度 (2007)
 * Ⅰ・ⅡともにA4版
10. 平城京展図録
 第3回 (1985)、第4回 (1986)、第5回 (1987)、第6回 (1988)、第7回 (1989)、
 第8回 (1990)、第9回 (1991)、第10回 (1992)、第11回 (1993)、第12回 (1994)、
 第13回 (1995)、第14回 (1996)、第15回 (1997)、第16回 (1998)、第17回 (2003)、
 第18回 (2000)、第19回 (2001)、第20回 (2002)、第21回 (2003)、第22回 (2004)、
 第23回 (2005)、第24回 (2006)、第25回 (2007)
 * 第4回～第15回までB5版 第17回はA5版、第18回～第25回はA4版
11. その他の刊行物 () 内は刊行年
 ①発掘調査報告書関係
 多聞庭城跡 発掘調査概要報告書 (1979) B5版
 平城京左京 (外京) 五条五坊七・十坪発掘調査概要報告 (1982) B5版
 平城京左京二条二坊十二坪 奈良市水道局庁舎建設地発掘調査概要報告 (1984) B5版
 平城京左京二条二坊十二坪発掘調査概要 (1997) B5版
 東宮園場整備事業田原東地区における埋蔵文化財発掘調査概要報告書
 Ⅰ (2006)・Ⅱ (2007) 両冊B5版
- ②その他
 奈良市発掘調査測量用基準点成果表・点の記 (1982) B5版
- * このほかに、奈良国立文化財研究所編集・奈良市教育委員会発行の刊行物があるが、
 当一覧からは割愛した。

印刷・製本仕様データ

表紙：アートポストカード220kg/m²・マットpp加工
見返し：白色上質紙70.5kg/m²
巻頭図版：特アート紙157.9kg/m²
本文：白色マットコート紙104.7kg/m²
本文フォント：ひらぎの明朝体
製本：左開き・糸かがり綴じ

©2008 by the Nara Municipal Board of Education

No part of this publication may be copied or reproduced in any form without written permission from the copyright owner. Printed in Japan.

奈良市埋蔵文化財調査年報 平成17(2005)年度

ISSN 1882-9775

印刷 平成20(2008)年3月17日

発行 平成20(2008)年3月26日

編集 奈良市埋蔵文化財調査センター

630-8135 奈良市大安寺西二丁目281番地

TEL 0742-33-1821

FAX 0742-33-1822

URL <http://www.city.nara.nara.jp/>

E-mail maizoubunka@city.nara.lg.jp

発行 奈良市教育委員会

630-8580 奈良市二条大路南一丁目1-1

TEL 0742-34-1111(代)

印刷 株式会社 明新社

630-8141 奈良市南宮終町三丁目464番地

**ANNUAL RESEARCH REPORT
OF
ARCHAEOLOGY IN NARA CITY AREA
2005**

CONTENTS

- I PRELIMINARY REPORTS OF ARCHAEOLOGICAL
EXCAVATIONS IN NARA CITY AREA IN 2005.

- II REPORTS OF ARCHAEOLOGICAL SCIENCE.

- III REPORTS OF CONSERVATION AND MANAGEMENT
FOR ARCHAEOLOGICAL SITES AND MATERIALS
IN 2005.

APPENDIX

PRELIMINARY REPORTS OF ARCHAEOLOGICAL
EXCAVATIONS AT THE ZENIYAKUBO SITE.

**NARA MUNICIPAL BOARD OF EDUCATION,
2008**

ANNUAL RESEARCH REPORT
OF
ARCHAEOLOGY IN NARA CITY AREA
2005

NARA MUNICIPAL BOARD OF EDUCATION , 2008